

# パンデミック下における医療資源の選択的配分

大川龍(人間学コース)

(指導教員：堂園俊彦)

キーワード：パンデミック、医療資源、配分、公正

## 序論

緊急事態下では、医療に対する需要が大きくなり、供給を上回る場合がある。特に人工呼吸器やICUの病床数、ワクチンといった希少性が高い資源は、その影響が顕著である。その場合には、正当な倫理的原則に即して配分を行うことで、限られた資源を最大限活用することが求められる。

本稿は、医療資源が枯渇した際に、正当性を持った配分を行うための倫理原則を追求することを目的としている。具体的には、①パンデミック発生前の段階における対策と、②資源が枯渇した状況における配分について議論する。②では、具体的な配分の例として、ワクチンと人工呼吸器について検討する。

## 第一章 パンデミックへの対策

### 第一節 準備計画について

パンデミックは被害の規模を予測することが困難であるため、事前にどれほど準備しておくべきかという問題がある。万全の備えによって、医療資源が枯渇する状況を防ぐことは理想的であるが、日常の医療サービスや、他の行政と並行して備えるため、準備にも限界がある。また、準備にすべての資源や労力を費やすことは、資源が枯渇した場合の対応が疎かになる危険もある。そのため、適切な量の備蓄を行い、それらが枯渇した場合の対応を想定することが、妥当である。

### 第二節 予防原則について

備える段階では、予防原則が取り上げられる。予防原則とは、科学的にその安全性が証明されていないために、不確実性が存在し、深刻な被害が想定されるものは避けるべき、または予防策を考えるべきという原則である。しかし、この原則には注意が必要である。

リスクは有無ではなく、被害の規模と発生確率から考えなければならぬ。1つのリスクを避けようとするのではなく、数多く存在するリスクの中から、対策すべきリスクや受容すべきリスクなどを区分して備えることが重要である。予防原則による準備は、1つのリスクに固執してしまう危険があるため、避けるべきである。

### 第三節 日本におけるパンデミック対策

2009年の新型インフルエンザ流行を契機として、日本で

は、新型インフルエンザ等対策政府行動計画が作成され、パンデミック発生時の政府の行動について、指針が示された。

この計画では、海外から日本へのウイルス侵入は不可避であることを前提し、国民の健康・命を保護することと、国民の生活及び経済への影響を最小限に抑えることの2点を主な目標としており、医療サービスの維持だけでなく、社会経済の保護も重要であるとされている。

### 第四節 「想定外」を想定することの必要性

パンデミックや自然災害は、発生の予防が不可能である。しかも、被害の規模があらかじめ予測することはできない以上、万全の備えではなく、被害の最小化を目指すことが、対策・対応として最も適切であると考えられる。

### 第五節 準備計画の条件

ナオミ・ザックは、災害や緊急事態に対する準備計画を作成する上で、平和な生活における共通の倫理的価値から準備を行うべきであるとし、その条件を提示している。

1つ目は、災害発生以前に、計画されることである。発生後では、場当たりの印象が強く、また冷静な判断が困難であると想定されるためである。2つ目は、計画に偏りが無いことである。特定の集団に利益が集中するような偏りは避けるべきである。また、予測が困難な緊急事態に対し、柔軟に対応するためにも、ある程度の一般化が求められる。

緊急事態において、平時の倫理的原則に沿った計画は、市民にとっても受け入れやすく、正当性が強いものである。しかし、すべての人を平等に扱うことは、公正とは異なるものであるため、緊急時においては、救う者を選択することや、一部の者に優先的な順位を設定することも必要である。

## 第二章 緊急事態時の対応

### 第一節 資源枯渇時の目標

規範概念に関する倫理学は主に、帰結主義、義務論、徳理論の3つの立場に分けられる。しかし、どの立場であっても「反証が提示されない限り、より多くの人の命を救うことは正しい行為である」という命題は正当であると判断する。

救命数最大化という命題は、直観的かつ倫理的にも妥当性が強いものであり、緊急時における目標としても適切である。しかし、救命数最大化は公平に反する場合も想定される。特に患者の年齢や職業といった属性を、どこまで考慮す

るかということに関しては、慎重に吟味するべきである。

## 第二節 ワクチン配分の場合

ワクチンの役割は、感染症の重症化・感染拡大を防ぐことや、それによって医療機関の負担を軽減することである。

救命数の最大化を目標とする場合、ワクチンの配分において最優先されるグループは主に2つである。1つ目は、リスクグループである。このグループには、高齢者や気管支系の基礎疾患を持つ人々、妊婦や幼児など、重症化リスクが高い人々が含まれる。2つ目は、医療従事者のグループである。

次に優先されるグループは、社会において必要となる職種、いわゆるエッセンシャルワーカーである。どの職種をエッセンシャルワーカーとするのかは常に問題となる。具体的には、医療従事者が活動するために必要な職種（保育士や公共交通機関を維持する人々）や、リスクにさらされる職種（介護職員など）が考えられる。しかし、各国のワクチン配分から、エッセンシャルワーカーの定義は経済状況や価値観によって異なることが分かる。

## 第三節 人工呼吸器の配分

人工呼吸器配分の基準は、重篤な状態を脱する可能性と装着する期間の2点の疫学的要素から構成される。その際、待ち時間や先着順は考慮されない。これらの要素は、偶然的なものであり、医療資源を選択的に配分することとは異なる。また、先着順に沿った治療では、患者の状態を考慮することができないため、不公平な状況に陥る可能性もある。全く同じ健康状態である人の間に、病院へのアクセスによって格差が生じることは妥当ではない。

## 第三章 人工呼吸器の再配分

救命数最大化を目標とする場合、人工呼吸器を取り外して他の患者へ再配分を行う可能性について議論する必要がある。ここでは、取り外される患者が終末期である場合と、回復の可能性が否定できない場合に区分して検討を行う

### 第一節 終末期の患者からの人工呼吸器の取り外し

終末期の患者から人工呼吸器を取り外す行為は、医師を主体とした作為である。しかし、この行為は殺人のような積極的な加害行為とは異なるものである。というのも、患者が救命不可能であると判断された場合、人工呼吸器の使用は、死へと向かう患者の状態を、人為的に一時固定しているに過ぎないからである。そのため他の患者を救命するために、回復の見込みがない患者から人工呼吸器を取り外すことは殺人行為とは異なるものであり、人工呼吸器の備蓄が底をついた状況では、再配分を行うことは正当化される。

### 第二節 回復可能性がある患者からの人工呼吸器の取り外し

更に一歩進んで、救命数最大化という目標を達成するならば、回復の可能性が否定できない患者から、回復の可能性がより高い患者への再配分についても検討する必要がある。

臓器移植においては、デッド・ドナー・ルールがあり、同意の有無に関わらず、生体から生死に関わる臓器の摘出を禁止している。これは、人が人格を無視され、手段として扱われることを防ぐためである。この原則に基づくならば、患者の死が手段として扱われるような再配分は行うべきではなく、回復の可能性が否定できない患者からの再配分は避けるべきである。

## 第三節 治療方針の決定における、意思表示の重要性と限界

患者の意思に依拠し、回復の可能性が否定できない患者からの再配分を認めている立場も示されていることから、「本人の意思」を中心に検討を行う。

治療方針を決定する際、患者の意思を尊重し、事前に、その意思を確認しておくことが必要である。しかし、事前指示書を作成した後の心変わりや、治療に患者の意思を正確に反映させる難しさから、事前指示書に従うことが、必ずしも患者の意思を尊重しているとは限らない。この問題を解決するとされているのが、アドバンス・ケア・プランニング

(ACP) である。ACPでは長期間にわたって患者と関係者が話し合い、患者の人生観・価値観を踏まえて医療方針が決定される。こうしたプロセスを辿ることは、患者本人の意思が確認できない状況ではとりわけ重要である。

しかし、パンデミックという状況において、患者と医師がそれほどの信頼関係を築くことは困難であると想定される。そのため患者の意思を根拠に、回復の可能性が否定できない患者から再配分を行うことは避けるべきである。

## 結論

パンデミックにおいて、救命数最大化を目標として、医療資源の配分を行うことは、限られた医療資源を最大限に利用するために必要なことである。しかし、救命数最大化と公平は異なるものであり、救命数だけでなく、患者の属性や、希少な資源の再配分の正当性なども考慮することで、公平な配分を目指すことが重要である。また、医療資源の配分は、個人・集団に優先順位をつけることであるため、本来、平等である人の尊厳に相対的な価値を付与することとなる。しかし、医療資源が限られた状況において、資源を最大限利用するためには、配分は不可避である。そのため、現在の新型コロナウイルスの流行を契機に、パンデミックへの対策・対応について、議論を行っていくことが、最も重要である

## 主な参考文献

- ナオミ・ザック『災害の倫理 災害時の自助・共助・公助を考える』、勁草書房、2020年。
- 一ノ瀬正樹『いのちとリスクの哲学 病災害の世界をしながらに生き抜くために』株式会社ミュー、2021年。
- 広瀬巖『パンデミックの倫理学 緊急時対応の倫理原則と新型コロナウイルス感染症』勁草書房、2021年。